

駒澤大学図書館蔵『類題法文和歌集注解』と その「尼」の項に見る畑中多忠の尼僧観

海 老 澤 早 苗

はじめに

仏教の經典論著や教理學説の趣旨などを和歌として詠んだものを、「釈教歌」という。

寛政二年（一七九〇）にこの釈教歌を集めて、宗派や經典別に分類し、これに注釈を加えた釈教和歌集が『類題法文和歌集注解』（以下本文中では『法文和歌集』と略称する）二七巻である。

本書は、仙台藩の儒者藤原盛雄、通称畑中多忠（一七三四～九七）が、藩主伊達重村の命を受け、長い間の研究の成果として著したものであり、釈教歌を種々の勅撰和歌集、歌集、家集、物語、説話集等の数十種の文献から抽出し、一々の歌にその出典や詠者を記し、それが仏教のいかなる宗流に属し、いかなる經典や論疏等のいかなる部分や趣旨を詠んだものであるかを詳しく検討したものである。藩主の仏教教養書という一面も有するものと考えられる。駒澤大学本は、畑中多忠

が藩主に献上した完全な原本である。

この駒澤大学本『法文和歌集』についての先行研究は、小川靈道氏「類題法文和歌集注解について」（『東洋学研究』復刊一、一九五五）。間中富士子氏「類題法文和歌集注解考」（『鶴見女子大学紀要』四、一九六七）。同じく間中富士子氏「類題法文和歌集注解解説」（畑中多忠著『影印版類題法文和歌集注解』第一巻、世界聖典刊行協会、一九八三）（これは、前者「類題法文和歌集注解考」に少しく手を加えたものであり、本稿では、これら二つの論文を同種のものとする）。塚田晃信氏「解題」（『古典文庫』四八一『類題法文和歌集注解』五、一九九三）等が挙げられる。

いずれの論攷も、書誌学的な研究を含み、その研究内容には齟齬がみられ、正確な書誌の調査が必要と考えられる。また、内容に関する論述は、その成立や『法文和歌集』を構成する客観的な内容把握、釈教和歌集研究史における本書の地位の研究、畑中多忠その人の生涯や業績についてが主であり、そこから著者の思想にまで検討に及んだ論攷はない。

駒澤大学図書館蔵『類題法文和歌集注解』とその「尼」の項に見る畑中多忠の尼僧観（海老澤）

そこで本稿では、今一度、駒澤大学図書館蔵『法文和歌集』の書誌学的研究をかえりみると共に、巻二三の「尼」の項に、畑中多忠の尼僧観を若干検討してみたい。

『類題法文和歌集注解』と畑中多忠

・『類題法文和歌集注解』について

本書は、巻頭の寛政二年三月の序文によると、まず三〇余年前に先の藩主（仙台藩主六世）伊達宗村に命を受け、滕建得と共に旧本法門類題を編じたものが原本であり、それは題に従って釈教歌を類聚したのみであったようである。しかし、再びその注釈書の作製を藩主七世重村に命じられ、自分は本来仏教の教えに対しては門外漢であり、聊か忸怩たる思いがしないでもないが、命を受けて辞することも出来ず、懸命に努力して完成を見た、という経緯を持つ書物である。この序文に続いて多忠は「異域本朝仏法流派譜」と題し、李長者の華嚴論の説に基づいて一〇宗の概略を述べ、更には『仏祖統記』の説によって達磨禪・浄土・律等を補い、異域一三宗の概観を明らかにしている。次いで我が国の仏法伝来の宗を分けて依経の和歌の便りとするとして、天台宗、真言宗、華嚴宗、三論宗、法相宗、律宗、禪宗、浄土宗の順に一々各宗史・宗義の大枠が記されている。この大枠に続いて、第一巻からが本書の実際の内容となり、⁽¹⁾ 天台宗から始まる。

収集されている釈教歌は、前述の通り、天台・真言・華嚴・三論（含成実）・法相（含俱舍）・律・禪・浄土の八派に分類され、その歌が詠んでいる宗派の経論等を指摘説明している。上記分類に入らない釈教歌は、諸派共通の通経論門や仏菩薩や中国日本の高僧に関するもの、仏教関係の法会、用具や山岳・土地・寺院に関するものや、一乗・二諦・三宝等の法類に関するものとして別出されている。

宗派別の分類では、天台に属する『法華経』関係の歌が全体の半数以上に及んでいる。

・畑中多忠について

仙台藩主、連歌に秀でた父の指導のもと和学の研鑽を積み、漢学を別所穀城・蘆野東山に支事した。漢学者でありながら、博学宏才で諸子百家に通じ、詩歌文章を能くしたとされ、当時仏教については、門外漢であったにも拘わらず、恐らく専門家の教えを受け、自らも仏典を渉獵して、日本の仏教諸宗に通づるようになったと考えられる。東国第一の儒者とも称された。藩主伊達重村の顧問として江戸に入り、細井平洲・井上金城らと交遊し、諸藩邸の詩歌会に出席して文才を発揮した。

『類題法文和歌集注解』についての書誌学的検討

先に挙げた、駒澤大学本『法文和歌集』を研究した先学達

に共通した書誌学的調査の項目は、概ね総冊数・総巻数、題簽、内題、蔵書印、装幀、法量、料紙、遊紙、全丁数等に渡っている。これらを小川氏、間中氏、塚田氏の研究に比較検討すると①題簽、②蔵書印、③料紙、④全丁数に明らかに齟齬が見られる。そこでこれらを具体的に記してみると、小川氏①金箔散らしの白紙。②毎巻頭に「伊達伯観瀾閣図書印」。③薄葉白紙。④一五五九丁。間中氏①金箔を散らした白色の各冊題簽に、「類題法文和歌集注解」と書される。②その下に「伊達伯観瀾閣図書印」なる蔵書印がある。③竹紙、④一六一三丁。塚田氏①表紙左肩に貼付され、金箔散らし白地の短冊型。②各冊一丁表右下に「伊達伯観瀾閣図書印」とある。③薄手の楮紙。④一五五六丁。といった具合である。

そこで筆者が本書の調査を取ってみると、これらの項目について、①表紙左肩に貼付され、金箔散らしの白紙短冊形、書名巻名等無記入。②一冊目は一丁表右下、二冊目以降は、一四冊目を抜かして全ての冊に二丁表右下（遊紙を一丁と数える）内題下に「伊達伯観瀾閣図書印」とある。朱陽文印。③薄手の鳥の子紙。④一五五九丁。という結果となった。従って、題簽、蔵書印については、間中氏の記述に訂正すべき点を確認され、丁数については、小川氏と筆者の数値が一致する為、この数値が極めて信憑性に富むものであることが確認できる。これらの内容を含めて、駒澤大学本『法文和歌集』

の書誌学的内容を表記してみると、以下のようになるであろう。総冊数・総巻数：二〇冊二七巻。題簽：金箔散らしの白紙。短冊形。書名巻名等無記入。内題：類題法文和歌集注解。蔵書印：一冊目は一丁表右下、二冊目以降は、一四冊目を抜かして全ての冊に二丁表右下（遊紙を一丁と数える）内題下に「伊達伯観瀾閣図書印」とある。朱陽文印。装幀：袋綴じ（線装本）。高麗納戸色の絹装。法量：縦一九・八×横一四・二糎。料紙：薄手の鳥の子紙。遊紙：各冊とも前後に各一丁。全丁数：一五五九丁（遊紙を含む）。

畑中多忠の尼僧観

多忠は、『法文和歌集』巻二三「尼」の項に、以下の二首の尼の和歌を取り上げる。まず一首目は、

我を君なにはの浦にありしかはうきめをみつのあまとなりనికి。
（『古今和歌集』 読み人知らず）

であり、内容は、あなたが私を何か恨んでつれなくしたので、私は難波の三津寺で浮き布を刈る海女同様の憂き目をみて尼になりました。というものである。人生に対する消極的ニュアンスを漂わせた歌である。また今一首は、

もしはやくあまならぬあまの姿にもからき浮世や思ひすつらん。
（『新撰和歌六帖』 信実）

という歌であり、藻塩を焼く海女ではないが、尼の姿を見る

駒澤大学図書館蔵『類題法文和歌集注解』とその「尼」の項に見る畑中多忠の尼僧観（海老澤）

につけて、彼女がつらいこの世を心の中で見捨てていっているのではないかと思われる。という内容である。本歌もまた厭世的歌といえよう。

これら二首の歌を挙げながら多忠は「あまの歌古集にあまた侍れと専用ならざるはのせす。」と注解し、「大智度論云、仏弟子に七衆あり。一比丘、二比丘尼、三学戒尼、四沙弥、五沙弥尼、六優婆塞、七優婆夷なり。善見律に尼者女也。文句云、通称女為尼。名義集比丘尼称阿姨。師姨者梵云阿梨夷、此云尊者、或翻聖者。今言阿姨略也。」と『大智度論』、『善見律毘婆沙』、『法華文句』、『翻訳名義集』等の仏教経典から、（専用の）尼の定義を提示している。つまり、尼の歌は古い和歌集には沢山ある、ここにも二首挙げたが、それらに表現された多くの尼は、尼としての特定の規程を充たすだけの器量をもつ尼ではないため、これ以上ここには掲載しない、というのである。

多忠は『法文和歌集』序文に「^ニ下^テ敢^テ仮^ニ外典^ノ之言^ヲ」^{中セ私義上}とあるように、和歌の注釈にあたつては、外典の学における知識や私意を全く挿入しなかったようである。仏教教義に忠実な注釈を行った多忠であればこそ、上記のような仏典の教義をみたす尼こそが本来の（専用の）尼であると考え、尼の歌は二首のみとしたのではなからうか。ここに、『大智度論』や『善見律毘婆沙』等に記載されているような、

厳密な具足戒を受け、菩提心を発して前向きに出家した、尊敬されるべき聖者、宗教者としての尼僧こそ、本来の尼であるとする畑中多忠の尼僧観を窺うことが出来る。⁽²⁾

また、紙面の都合上、本稿で言及することは避けるが、女性宗教者である尼僧を捉えるにあたって『法文和歌集』に示した女性に対する観念も、つまり多忠の記した忠実な仏教的女性観も、このような尼僧観の思想的背景として考慮を要するものと考ええる。今後の課題としたい。

おわりに

本稿では、駒澤大学図書館蔵『類題法文和歌集注解』について、先行研究をかえりみながら、それらの書誌学的齟齬を見直し、その巻二三の「尼」の項から、著者畑中多忠の尼僧観を若干検討した。

書誌学的には、先学の題籤題、蔵書印、料紙、全丁数等に改めるべき点があることを明確にし、尼僧観については、私意を挟まない、極めて仏教教義に忠実な尼僧観を多忠が踏襲していたことを推察した。

『法文和歌集』には「女人往生」、「婦女身」、「龍女成仏」などの項もある。今後はそれらの項にも注目し、深く多忠の女性観に迫ると共に、その女性観と尼僧観の関係を考察してみたいと考えている。

1 『類題法文和歌集注解』卷第二七、「和歌法文惣篇目」によれば、第二卷から本書の実際の内容が始まるということも出来る。

2 『善見律毘婆沙』卷第一四には「比丘尼者。從三部僧中白四羯磨受具足戒。」とある（大正藏二四・七七四a一七）。

〈キーワード〉 『類題法文和歌集注解』、畑中多忠、一八世紀、書

誌学、尼僧観

（駒澤大学禅研究所研修生）

新刊紹介

田中 教照 編・著

『仏教最前線の課題』

A五版・二三六頁・本体価格二、五〇〇円
武蔵野大学出版会・二〇〇九年一月

駒澤大学図書館蔵『類題法文和歌集注解』とその「尼」の項に見る畑中多忠の尼僧観（海老澤）